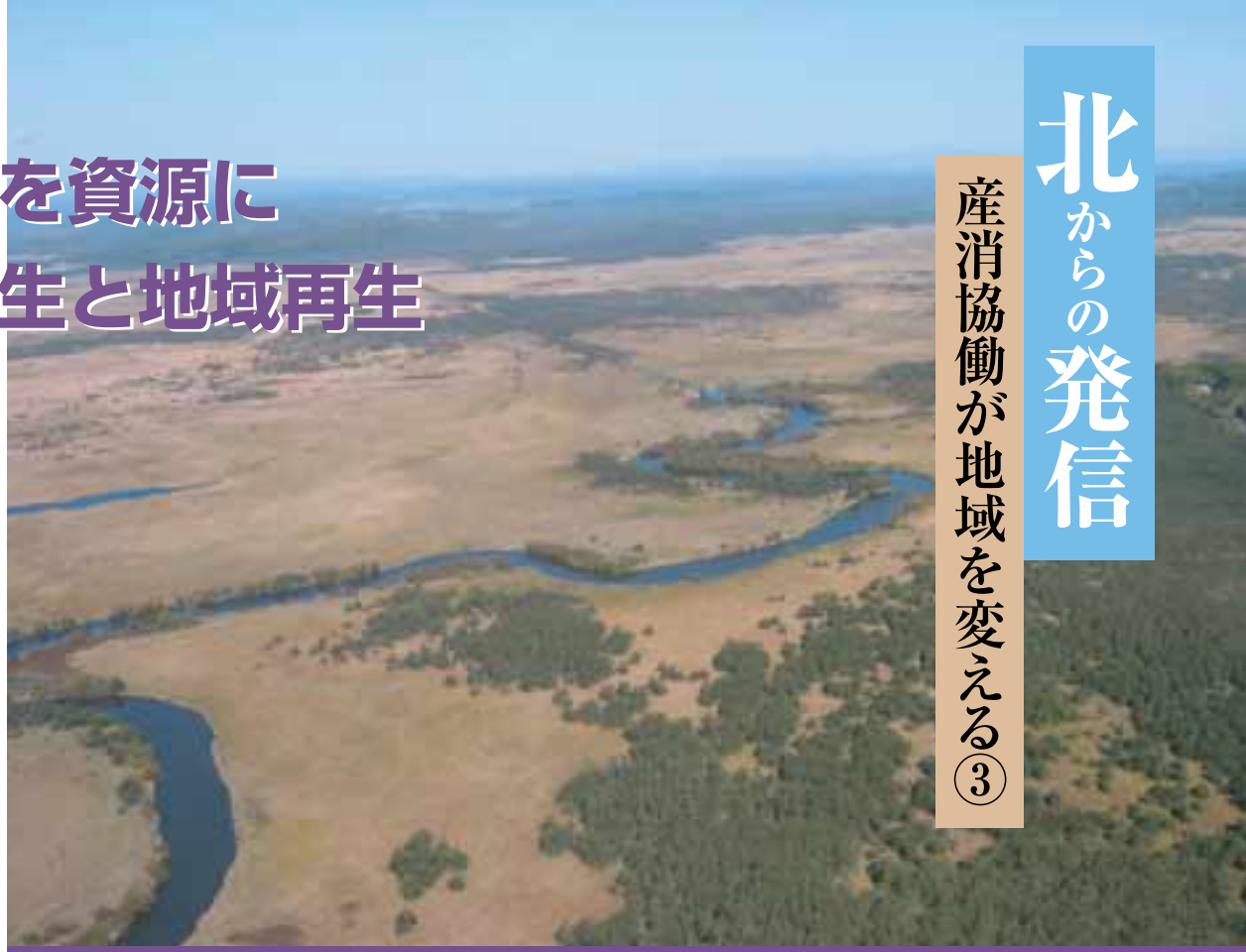


産消協働が地域を変える③

廃棄物を資源に 環境再生と地域再生



環境と地域再生を目指す取組みが、釧路湿原をかかえる地域で

道東・標茶町に2002年4月に誕生したカムイ・エンジニアリング社は、地域の廃棄物を資源に、環境再生と地域再生を目指すベンチャー企業です。地域の知恵と力を結集し、良質の製品づくりを通して、環境を守り、雇用を確保する取組みは産消協働の実践といえます。

環境を守りながら、新しい産業創出を

カムイ・エンジニアリング社のある標茶町の南部には、国立公園で、ラムサール条約登録湿地でもある釧路湿原があり、国の天然記念物タシロウをはじめ、氷河期の依存種（生き残り）とされるゴトウアカメイトトンボやキタサンシヨウオオ、日本最大の淡水魚イトウなど、2千種以上の動植物が生息しています。また、町内の約22%を占める広大な牧草地を背景に、基幹産業である酪農業は人口の4倍以上の乳牛によって、年間16万トン以上の生乳が生産されています。

その一方で、乳牛の糞尿や牧草を発酵させる牧草ロールの廃プラスチック処理、さらにカラマツ間伐材の処理など、いくつもの課題もありました。また、道東地域では、国内最後の炭鉱・太平洋炭鉱の閉山、国の財政悪化に伴う公共事業の削減など、地域産業をおびやかす不安要素が見られていました。

カムイ・エンジニアリング社は、こうした背景の中、「地域の環境を維持しながら、地域の課題を新しい産業に結び付けていくことができないうだろうか」という思いのもとに、標茶町の有志らが勉強会を重ね、設立に至った企業です。勉強会は、釧路公立大学の小磯修二教授のアドバイスを受けて発足。1年目は、地域の課題を洗い出すとともに、環境再生にかかわる勉強会を重ね、廃棄物を新たな資源として活用し、新産業を創出する取組みをひとつのまちの枠組みで展開していこうと、「地域ゼロエミッション」という理念を打ち出しました。また、2年目は「しべちゃゼロエミッション21研究会」を立ち上げ、北海道経済産業局が所管するコーディネーター活動支援事業に採択され、先進地の調査や視察を行いました。

そして、その過程で出会った岐阜県にある技

術開発研究所と技術提携し、廃木材と廃プラスチックから作られる木質複合材の製造、植物の根の浄化機能によって川や湖の水を浄化する研究活動や事業、網状の構造培地を活用した藻場の再生実験などを実践すべく、小磯教授も取締役に参画してカムイ・エンジニアリングが設立されました。

地域みんなで立ち上げた企業

カムイ・エンジニアリング社設立の際に、最も苦労したのが資金集めでした。事業の核となる木質複合材を製造する工場建設に必要な資金の融資要請に対し、実績もない企業に地域の金融機関はなかなか融資をしてくれません。そこで、小磯教授が考えたのが、コミュニティ・エンジェルです。

アメリカでは、ベンチャー企業の創業初期段階はハイリスク・ハイリターンのため、一般の市場で資金を調達するよりも特定の投資家がつくり経営者を見極めて投資をしています。そのようなベンチャー創業初期の投資家を「エンジェル」と呼び、エンジェルの存在があつてこそ成功したIT企業が数多くあります。

そのエンジェル役を地域住民が担うというもので、地域のお金を直接調達し、住民の力で地域のお金を循環させようという狙いです。

具体的には、縁故私募債という手法で、地域の皆さんに社債を直接購入してもらおう。そして、それを資本に銀行から融資を受けるのです。5人の取締役に声をかけたところ、標茶町を中心に40人弱の人々が社債購入に賛同してくれ、約1億円の資金が集まり、それが契機となって工場建設が可能になったのです。

2003年8月に工場が完成、新しい従業員が20人ほど加わり、工場は本格的に稼働を始めました。採用した従業員の中には、太平洋炭鉱



「愛地球博」でカムイ・ウッドのフェンスが採用された



カムイ・ウッドを使った新潟薬科大学の円形デッキ



カムイ・ウッドのフラワーボックスは耐水性・耐久性が高い



標茶高校の生徒が協力して進められている水質浄化の植生実験



網状構造培地とコンクリートブロックを組み合わせ、厚岸沖に投入した藻場再生実験

このように高い品質と環境への配慮が評価されて、選定の厳しい全日空の機内販売誌に掲載されたほか、環境資源の適正な循環の利用・廃棄物の減量化を促進し、循環型社会の形成を進める「北海道認定リサイクル製品」の認定、リデュース・リユース・リサイクル推進協議会主催の「リデュース・リユース・リサイクル推進協議会長賞」受賞など、徐々に評価を高めています。

また、十勝エコロジーパークのコテージや帯広・穂別・斜里などの高校の柔剣道場、新潟薬科大学など、釧路管内だけでなく、道内外に施

の元職員もおり、現在は管理職を務めている社員もいます。

質の高い商品が評価

事業の核となっている木質複合材「カムイ・ウッド」は、廃木材を粉にしたものに、廃プラスチックを合わせて、溶融し、圧力をかけて押し出し、製品化されます。この製品は、耐水性・耐久性に優れている上に、100%リサイクルできるという利点があり、屋外で使用するフラワーボックスやベンチ、コテージ、さらに建築物の外壁材などにも利用されています。

こうした高い品質と環境への配慮が評価されて、選定の厳しい全日空の機内販売誌に掲載されたほか、環境資源の適正な循環の利用・廃棄物の減量化を促進し、循環型社会の形成を進める「北海道認定リサイクル製品」の認定、リデュース・リユース・リサイクル推進協議会主催の「リデュース・リユース・リサイクル推進協議会長賞」受賞など、徐々に評価を高めています。

また、十勝エコロジーパークのコテージや帯広・穂別・斜里などの高校の柔剣道場、新潟薬科大学など、釧路管内だけでなく、道内外に施

工実績が見られるようになりました。さらに、今年は「自然の叡智」をテーマにした愛知万博「愛・地球博」のワンダーサーカス電力館のフェンスに、十勝管内のダムに溜まった流木を原材料に使用し製造したカムイ・ウッドが使用され、自然環境に配慮する姿勢が全国に知られるきっかけになりました。

地域にこだわるさまざまな取組み

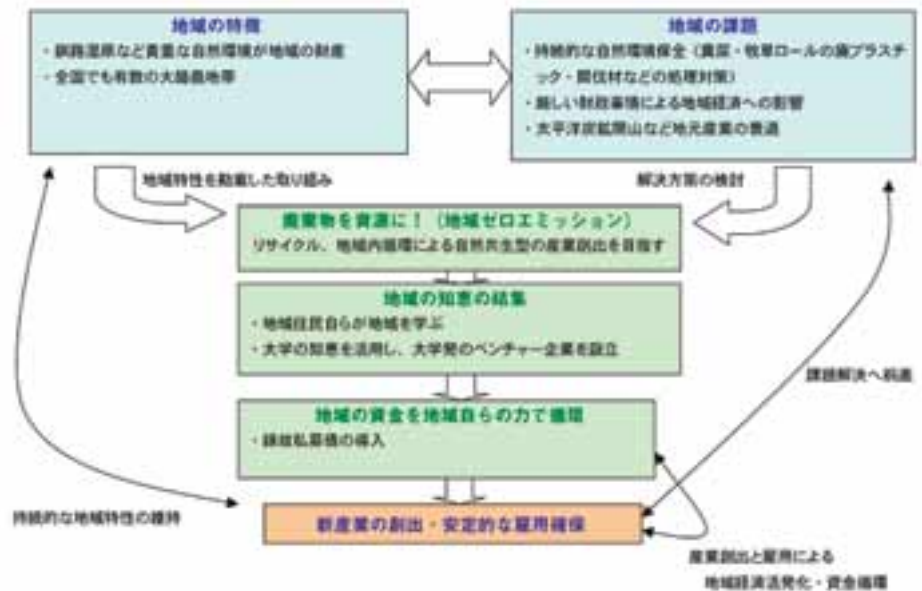
カムイ・エンジニアリング社では、地域に根差した産業であるために、地域との連携を重要視しています。

植物の根の力で水を浄化する研究活動では、地元・標茶高校の協力を得て、地域に生息する植物の中で最も効果的な植物を探る植生実験を行っています。

また、藻場再生実験では、森・川・海が一体となったエコロジカルな視点で、地元の森林組合、漁業協同組合など、森、川の上流から下流、そして海にかかわる各団体と連携を図りながら、海の再生を目指して実験に取り組んでいます。

釧路管内が一大酪農地であり、広大な

図 カムイ・エンジニアリング社による産消協働のしくみ



な牧草地を抱えているという地域の特性に配慮した取組みも進んでいます。原料の廃木材に替えて、「廃棄物としての牧草」に着目し、木材を使わずに草と廃プラスチックのみで製造した「カムイ・ウッド」の技術開発にも取り組んでいます。

地域の課題を克服しながら良質の製品を生み出していくことで、新しい地域産業を根付かせ、安定的な雇用を創る。カムイ・エンジニアリング社の取組みは、常に地域にこだわることで、消費者と向かい合っています。そして、最も消費者が高い意識を持つキーワードに結び付いているのです。産消協働を実践するカムイ・エンジニアリング社の取組みは、内外で注目される存在となっています。

フリーライター 関口麻奈美